

 慶應義塾大学 大学院
健康マネジメント研究科
入学案内2016

Keio University
Graduate School of Health Management

- 看護学専修
専門看護師プログラム
- 医療マネジメント専修
- スポーツマネジメント専修
公衆衛生プログラム

先導

これまでの知的枠組みを超えて
「健康」という大きなテーマに
挑戦する大学院



健康マネジメント研究科委員長
高木 安雄

先導者としての健康マネジメント 創立10年目を迎えて新たな取り組み

本研究科は健康長寿を考える分野横断的、学際的な研究科として2005年4月にスタートして、10年目を迎えた。本研究科は、①健康を不健康との対立概念ではなく、連続的な概念としてとらえ、②システムや組織のマネジメントと個人の状態に応じたマネジメントの両方を実現する、③これまでの「勘や経験」に頼ったケアから科学的で適切なケアへの転換のために、健康や医療をめぐるデータの分析、活用などに力を入れて来た。

福澤諭吉先生の「自我作古（我より古を作す）」の精神をもとに、新たな健康長寿の実現に励んでおり、修了生も様々な分野で活躍するようになっている。

しかし、団塊世代が後期高齢者となる2025年に向けて、国内はもちろん海外からも世界一のスピードで進む超高齢社会のわが国における健康長寿の取り組みに大きな関心を寄せており、こうした時代の変化をふまえて、本研究科も次の10年間にわたって新たな取り組みを始めることになった。

すなわち、看護学専修、医療マネジメント専修、スポーツマネジメント専修の学位はこれまで修士（看護学）、修士（健康マネジメント学）の二つであったが、医療マネジメント専修・スポーツマネジメント専修はそれぞれ修士（医療マネジメント学）、修士（スポーツマネジメント学）に変更したほか、公衆衛生プログラムを加えて、所定の単位取得を前提に修士（公衆衛生学）を取得できる途を用意した。看護学専修の専門看護師（CNS）プログラムでは、カリキュラムの充実強化を行っている。

これらは、現行の学位名では修了生の専門領域が不明確であること、この10年で医療経営、スポーツマネジメント、公衆衛生などを謳った大学院が増えていることから、専門性をより明確に示すほか、国内外でのキャリア形成に貢献できる学位名称に見直した。

最後に具体的な取り組みの一つを紹介する。それは、小熊祐子准教授が進める「+10（プラス・テン）」事業であり、地元藤沢市や藤沢市保健医療財団と連携・協力の下、市民講座や体操教室を開催している。この「+10（プラス・テン）」とは、“今より10分多く体を動かす”ことを指し、厚生労働省の「健康づくりのための身体活動指針（アクティブガイド）」において推奨しており、ふだんから元気に体を動かすことで、糖尿病、心臓病、脳卒中、うつ、認知症などのリスクを下げることができる。研究科の修了生の協力も得ながら、その指導、普及に励んでいる。

こうした取り組みが評価され、平成26年度に厚生労働科学研究委託費「身体活動コミュニティワイドキャンペーンを通じた認知症予防介入方法の開発」研究を獲得し（平成27年度からは日本医療研究開発機構研究費）、2020年の東京オリンピックで世界一の長寿国からの認知症予防の新たな発信ができるよう3年計画で進めている。

概要

設置目的

健康マネジメント研究科は、「健康」を軸として、看護・保健・医療・福祉・公衆衛生に関わる幅広い領域において先導的な役割を果たす、学際的な教育・研究を志向し展開する大学院です。これまで「健康」は、不健康な状態(ill-being)の対立概念である健康な状態(well-being)として捉えられてきました。しかし、高齢化や医学技術の高度化に伴い、慢性疾患や障害を抱えながら長期にわたって日常生活を送る人が多くなっている今日においては、そのような従来の概念は必ずしも適当ではありません。そこで、本研究科では、「健康」を誕生から死に至るまでの人間の健康状態の諸相を意味する連続的な概念として捉え直すこととしました。新しい健康の概念のもとでは、疾病あるいは加齢等が原因で日常生活に支障を来している人に対しては可能なかぎりのQOL(Quality

of Life:生活の質)の向上を図り、日常生活に支障はないが疾病を有する人に対してはより健全な生活を目指す環境作りを行い、疾病予備軍や健康な人に対しては楽しく有意義な自由時間を過ごしながら健康の維持・増進を促すマネジメントが求められます。また、急速な少子高齢化、疾病像の変化、医療技術の高度化、国民の健康志向の増大など、わが国の健康をめぐる環境が複雑化していることから、社会の多様化する要請に応えるためには、システムや組織のマネジメントと個人のマネジメントの両方を同時に成立させることが求められます。本研究科は、これまでの知的枠組みを超えて、国民の健康増進に資する看護・保健・医療・福祉・公衆衛生事業のあり方を構想し、合理的なマネジメントの実施に関する知識・技能を備えた人材の育成を目指しています。

■大学院健康マネジメント研究科(修士課程・後期博士課程)■

専攻名	看護・医療・スポーツマネジメント専攻
専修名	看護学専修、医療マネジメント専修、スポーツマネジメント専修
修業年限	修士課程：2年、後期博士課程：3年
入学定員	修士課程：40人、後期博士課程：10人
学位	看護学専修：修士(看護学)、博士(看護学) 医療マネジメント専修：修士(医療マネジメント学)または修士(公衆衛生学)、 博士(医療マネジメント学)または博士(公衆衛生学) スポーツマネジメント専修：修士(スポーツマネジメント学)または修士(公衆衛生学)、 博士(スポーツマネジメント学)または博士(公衆衛生学)

キャンパス

湘南藤沢キャンパス(SFC)

本研究科のメインキャンパス。看護医療学部校舎を拠点としています。図書室、キャレスペース、個人ロッカー、食堂などの利用が可能です。原則として月曜日から水曜日および土曜日に授業が行われます。

■アクセス

小田急江ノ島線・相鉄いずみ野線・横浜市営地下鉄ブルーライン「湘南台」駅西口よりバスにて約15分(「慶応大学」下車)
JR東海道線「辻堂」駅北口よりバスにて約25分(「慶応大学」下車)



信濃町キャンパス

原則として木曜日と金曜日に授業が行われます。図書館などの利用が可能です。

■アクセス

JR総武線「信濃町」駅より徒歩1分
都営地下鉄大江戸線「国立競技場」駅より徒歩5分



カリキュラム

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

看護学、医療マネジメント、スポーツマネジメントの3専修から成る本研究科は、各専修が相互に有機的に影響し合い、柔軟に連携して常に新しい学問領域を切り開きながらホリスティックに発展することを目指して、次のような方針を掲げています。

■学際的教育の重視■

多様な背景・専門の学生を受け入れている本研究科は、学生が互いの視点と言語を共有し、活発な議論を通じて切磋琢磨する、協働を通じて学ぶ環境を整えています。それゆえ、特定分野・領域の専門科目だけを履修するのではなく、様々な専門科目を履修することで視野を拡げ、社会の健康水準の向上に貢献できる基礎的能力を培うことを重視しています。

■実務と研究の融合の重視■

本研究科では、実務と研究を融合させた教育を重視しています。実践を通じて得られたデータを体系化することで理論を構築し、理論的枠組みを用いて現場の課題解決を図り、さらに現場からフ

ードバックされたデータをもとに既存理論を検証し修正する、実務と研究が相互に行き来する一連のプロセスを理解するために、本研究科ではインターンシップの機会が用意されています。

■実証的研究方法の重視■

保健・医療・福祉のいずれの領域においても、限られた資源を効率的に活用して効果的な成果をあげるためには、個人や集団を問わず、臨床的な合理性と経済的な合理性の両立が求められます。そのため、本研究科は、勘や経験に頼るのではなく、エビデンスに基づく合理的意思決定に必要なとされる実証的な分析手法の修得を重視しています。

カリキュラム構成

導入基礎科目・導入共通科目

本研究科は多様な背景・専門の学生を受け入れているため、専門領域での効果的な学習・研究に備えて、学生はそれぞれの実情に応じて基礎知識が不足する領域の学習ができるように、主に1年次春学期に「導入基礎科目」「導入共通科目」を設置しています。看護学、医学、薬学などの医療系学部出身者には社会科学系の科目、社会科学、人文科学、理工学などの非医療系学部出身者には保健・医療の基礎を学ぶ科目が用意されています。

分析手法基盤科目・分析手法発展科目

現代社会において、合理的意思決定には、勘や経験ではなく、データ分析に基づく実証的方法が求められています。また、経営的な合理性と臨床的な合理性の両立が必要であり、臨床現場と連携しての、集積された臨床データの分析に基づいた組織運営、制度設計が求められています。そこで、基礎理論・手法を身につけるために「分析手法基盤科目」「分析手法発展科目」の履修を重視しています。なお、学習成果をその後の専門分野における研究にも活用できるよう、1年次を中心に開講します。

専門科目

看護学専修、医療マネジメント専修、スポーツマネジメント専修、公衆衛生プログラムそれぞれの専門領域における高度な知識と技能を修得するための科目が用意されています。履修制限のある一部の科目を除き、専修やプログラムを問わず、自由に科目を履修できる仕組みが整えられています。

インターンシップ関連科目

実務教育と体系的講義との相乗効果や、インターンシップに備えての背景の理解や基礎知識の修得、インターンシップでの実務体験を通じて得た知識・知見の客観化・体系化のため、インターンシップ関連科目を設置しています。原則として実務家・医療従事者が講師を務めます。

特別研究科目

修士論文およびそれに相当する研究成果としての課題研究論文（インターンシップ）、課題研究論文（CNS実習）を作成するための研究指導を受ける科目として設置されています。

ディプロマ・ポリシー

修士課程では、修士論文または特定の課題についての研究成果である課題研究論文の審査および最終試験により判定されます。後期博士課程では、毎年度中間審査会において必要な指導・助言を受けると共に進歩の確認・審査を受け、博士学位論文の審査ならびにこれに関連する試験等によって、博士の学位を取得するにふさわしいか判定されます。

修了要件

2年以上在学し（休学期間を除く）、所定の授業科目を40単位以上（別途定める必修科目を含め、導入基礎科目4単位、導入共通科目4単位以上、分析手法科目8単位以上、専門科目およびインターンシップ関連科目16単位以上、特別研究科目4単位）を修得し、修士論文または課題研究論文（インターンシップ）の審査および最終試験に合格すること。なお、看護学専修の専門看護師（CNS）プログラムについては、別に定める。

■導入基礎科目			
経済学入門	法学入門	会計学入門	公共政策・財政学入門
臨床入門	ストレスケア入門		
■導入共通科目			
健康マネジメント概論	社会保障論	行動科学	ヘルスケア倫理学
基礎疫学			
■分析手法基盤科目			
ヘルスデータサイエンス	クオリティマネジメント論	ヘルスアウトカム評価論	基礎生物統計学I
基礎生物統計学II			
■分析手法発展科目			
臨床試験方法論	クオリティの解析と設計	クオリティエンジニアリング	ヘルス情報管理論
多変量因果解析	応用生物統計学	疫学研究の統計的方法	
■専門科目:看護学専修			
母性看護学	母性看護学方法論	母性看護学演習	小児看護学
小児看護学方法論	小児看護学演習	老年看護論	高齢者健康生活評価法
老年期疾患治療論	高齢者・家族援助論	老年サポートシステム・制度論	老年看護実践演習
認知症高齢者看護演習	老年専門看護実習	基礎看護学	看護技術方法論
基礎看護学演習	がん病態生理学	がん看護論	がん看護援助論
がん治療看護論	がん遺伝看護論	がん薬物療法看護論	緩和ケア演習
がん専門看護実習	慢性臨床看護学	慢性臨床看護学方法論	慢性臨床看護学演習
精神看護論	精神の健康生活評価法	治療の精神看護介入法	リエゾン精神看護論
精神保健医療福祉制度論	精神科治療技法	精神看護介入演習	精神専門看護実習
在宅・家族看護論	在宅・家族看護方法論	在宅・家族看護学演習	地域看護学
地域看護活動方法論	地域看護活動計画・評価論	看護理論	看護教育論
コンサルテーション論	看護研究	上級コミュニケーション演習	看護情報学
看護倫理	看護政策論	フィジカルアセスメント	臨床病態学
臨床薬理学			
■専門科目:医療マネジメント専修			
医療政策・管理学	ヘルスサービス財務管理論	ヘルスサービス人的資源管理論	ヘルスサービス経営倫理学
医事法学	リスクマネジメント論	ソーシャルマーケティング	医療経営戦略論
パーソナルケアシステム論	医療経済学	医療政治学	国際保健学
ヘルスビジネス知的財産論	医薬経済学		
■専門科目:スポーツマネジメント専修			
老年医学・老年学	高齢社会デザイン論	健康行動科学	ヘルスプロモーション
ヘルスコミュニケーション	健康運動科学	健康栄養科学	健康スポーツ経営論
健康スポーツマーケティング論			
■専門科目:公衆衛生プログラム			
環境・産業保健学	公衆衛生マネジメント	感染症疫学・サーベイランス	生活習慣病疫学
地域保健学			
■インターンシップ関連科目			
病院経営論	居宅サービス経営論	看護管理論	民間保険経営論
製薬産業論	医療機能評価論	健康都市デザイン論	バイオメカニクス・動作解析
運動・体力評価法	健康スポーツ経営戦略論	健康スポーツ地域デザイン論	健康スポーツ産業論
公衆衛生実践	健康ビジネス開発論		
■特別研究科目			
特別研究			

(注) 時間割は以下のURLから確認することができます。
<http://www.gakuji.keio.ac.jp/sfc/rishu/index.html>

教員紹介

看護学専修

専任教員



太田 喜久子
教授

専門
■高齢者看護学
研究キーワード
■高齢者の健康
■認知症高齢者ケア
■高齢者看護の質



金子 仁子
教授

専門
■地域看護学・地区
活動展開
研究キーワード
■ヘルスプロモーション
■地域看護管理
■児童虐待予防



小松 浩子
教授

専門
■がん看護学・緩和ケア、
慢性看護
研究キーワード
■乳がん看護
■ケアの質評価
■認知教育的アプローチ



近藤 好枝
教授

専門
■新生児看護学、母性
看護・助産学
研究キーワード
■新生児医療
■超低出生体重児
■介入研究



戈木クレイグヒル
滋子
教授

専門
■小児看護学
研究キーワード
■質的研究法
■ターミナルケア
■インフォームド・コンセント



武田 祐子
教授

専門
■がん遺伝看護の実践・
研究
研究キーワード
■家族性腫瘍
■遺伝看護
■がん看護



野末 聖香
教授

専門
■リエゾン精神看護
研究キーワード
■リエゾン精神看護
■専門看護師
■介入プロトコル



原 礼子
教授

専門
■在宅看護・家族看護
研究キーワード
■認知症の家族のケア
■訪問看護師の現任教育
■地域医療連携



藤井 千枝子
教授

専門
■基礎看護学
研究キーワード
■思考過程
■基本技術
■医療安全



宮脇 美保子
教授

専門
■基礎看護学
研究キーワード
■看護倫理
■ケアリング
■キャリア



小池 智子
准教授

専門
■看護管理・看護政策
研究キーワード
■チーム医療
■看護職のキャリア開発
■居宅看護ネットワークシステム

兼任教員

伊東 大介 医学部 専任講師
今村 知世 医学部 専任講師(有期)
内田 裕之 医学部 専任講師
大谷 壽一 薬学部 教授
大家 基嗣 医学部 教授
岡本 真一郎 医学部 教授
加藤 眞三 看護医療学部 教授
小林 正弘 看護医療学部 教授
小山 友里江 看護医療学部 准教授
佐谷 秀行 医学部 教授
嶋田 博之 医学部 助教
標 美奈子 看護医療学部 准教授
白波瀬 丈一郎 医学部 特任准教授(有期)
高石 官均 医学部 准教授
谷川原 祐介 医学部 教授
田淵 肇 医学部 専任講師
辻 哲也 医学部 准教授
辻 恵子 看護医療学部 准教授
橋口 さおり 医学部 専任講師
濱田 庸子 環境情報学部 教授
林田 健太郎 医学部 専任講師(有期)
福井 里佳 看護医療学部 准教授
副島 研造 医学部 准教授
福田 紀子 看護医療学部 専任講師
藤澤 大介 医学部 専任講師
船越 建 医学部 専任講師(有期)
宮川 祥子 看護医療学部 准教授
門川 俊明 医学部 教授(有期)
矢ヶ崎 香 看護医療学部 准教授
安田 恵美子 看護医療学部 准教授

講師(非常勤)

宇佐美 しおり 熊本大学 大学院生命科学研究部 教授
大荷 満生 杏林大学 医学部 准教授
岡田 佳詠 筑波大学 医学医療系 准教授
加藤 忠相 株式会社あおいけあ 代表取締役
桑田 美代子 青梅慶友病院 看護介護開発室長
小山 珠美 社会医療法人社団 三恩会 法人本部摂食嚥下サポート担当課長
小山 眞理子 日本赤十字広島看護大学 学長
齋藤 訓子 公益社団法人日本看護協会 常任理事
菅原 峰子 北里大学 看護学部 講師
田倉 智之 大阪大学大学院医学研究科
樽井 正義 慶應義塾大学 名誉教授
寺嶋 毅 東京歯科大学市川総合病院 呼吸器内科
樋山 光教 独立行政法人国立病院機構東京医療センター 精神科医長
福嶋 好重 横浜市立市民病院 精神看護専門看護師
堀越 由紀子 東海大学 健康科学部社会福祉学科 教授
増谷 順子 首都大学東京 健康福祉学部看護学科 助教
三上 れつ 慶應義塾大学 名誉教授
森岡 崇 慶應義塾志木高等学校 教諭
森田 夏実 東京工科大学 医療保健学部看護学科 教授
山下 由香 株式会社HRS 東太田リハビリ訪問看護ステーション
山本 則子 東京大学 大学院医学系研究科 教授

●看護学専修には以下の分野が設置されています。

母性看護分野、小児看護分野、老年看護分野、老年看護分野(CNSプログラム)、
基礎看護分野、がん看護分野、がん看護分野(CNSプログラム)、慢性臨床看護分野、
精神看護分野、精神看護分野(CNSプログラム)、在宅・家族看護分野、地域看護分野

医療マネジメント専修

専任教員



鎌倉 光宏

教授

専門
■感染症学
研究キーワード
■公衆衛生学
■HIV/AIDS
■国際保健



高木 安雄

教授

専門
■医療保障・医療制度論
研究キーワード
■高齢者医療
■患者満足度
■地域医療



前田 正一

教授

専門
■医事法学
研究キーワード
■インフォームド・コンセント
■医療安全管理・医療事故対応
■臨床倫理、研究倫理



山内 慶太

教授

専門
■医療政策・管理学
研究キーワード
■精神医療
■産業精神保健
■診療報酬制度



渡辺 美智子

教授

専門
■統計科学・多変量解析
研究キーワード
■潜在構造分析
■因果分析
■統計教育

客員教授

高橋 武則 目白大学経営学部／大学院経営学研究科 教授
増山 幹高 慶應義塾大学 客員教授

兼任教員

会田 一雄 総合政策学部 教授
池上 直己 慶應義塾大学 名誉教授
梅津 光弘 商学部 准教授
大藪 毅 経営管理研究科 専任講師
河井 啓希 経済学部 教授
佐渡 充洋 医学部 助教

講師(非常勤)

稲垣 中 青山学院大学 国際政治経済学部 教授
江面 美祐紀 ファイザー株式会社 経営企画管理本部医療政策部担当部長
河北 博文 社会医療法人河北医療財団 理事長
小林 米幸 医療法人社団小林国際クリニック理事長／院長
酒井 一博 財団法人労働科学研究所所長／常務理事
鎮目 美代子 慶應義塾大学病院 看護部長
菅原 浩幸 公益財団法人日本医療機能評価機構企画室長兼事業推進部長
玉井 真澄 (株)ソラスト 東日本ブロック 執行役員ブロック長
得丸 英司 株式会社星和ビジネスリンク 営業開発部長兼FPコンサルティング部長
平山 晃二 平和国際特許事務所 弁理士

スポーツマネジメント専修

専任教員



海老塚 修

教授(有期)

専門
■スポーツマネジメント
研究キーワード
■マーケティング
■コミュニケーション
■スポーツの価値



大谷 俊郎

教授

専門
■スポーツ医学
研究キーワード
■スポーツ医学
■バイオメカニクス
■膝関節



武林 亨

教授

専門
■公衆衛生学
研究キーワード
■疫学
■予防医学
■地域保健・産業保健



石田 浩之

准教授

専門
■スポーツ医学
研究キーワード
■運動療法
■予防医学
■健康増進



小熊 祐子

准教授

専門
■長期的な健康増進・維持について
研究キーワード
■予防医学
■運動疫学
■スポーツ医学



佐野 毅彦

准教授

専門
■スポーツビジネス
研究キーワード
■スポーツクラブ
■経済評価
■楽しさ

客員教授

竹田 恒和 公益財団法人日本オリンピック委員会会長

兼任教員

新井 康通 医学部 専任講師
入江 潤一郎 医学部 専任講師(有期)
岡村 智教 医学部 教授(有期)
勝川 史憲 スポーツ医学研究センター 教授
桑原 和代 医学部 助教(有期)
駒村 康平 経済学部 教授
清家 篤 慶應義塾大学／商学部 教授
新庄 琢磨 医学部 助教
高山 美智代 医学部 専任講師(有期)
高山 緑 理工学部 教授
石川 善樹 株式会社キャンサースキャン インノベーションディレクター

講師(非常勤)

岡田 哲 大成建設株式会社ソリューション営業本部 ビジネス・ソリューション部
兼本 卓明 外資系エンターテインメント企業在籍
神谷 宗之介 神谷法律事務所 弁護士
齋藤 義信 公益財団法人藤沢市保健医療財団 運動指導員
芝山 哲也 大成建設株式会社 執行役員 ソリューション営業本部部長
関 勝 神奈川県立保健福祉大学 教授 人間総合専門基礎担当学科長
袖川 芳之 京都学園大学 教育開発センター 教授
高田 和子 国立健康・栄養研究所 健康増進部 主任研究官
谷山 宏典 ストラテックス・パートナーズ CEO
古屋 佐知 株式会社アサント コーポレート企画室
増田 元長 HRBC株式会社 コンサルタント
山本 真司 株式会社山本真司事務所 代表取締役／静岡県サッカー協会評議員

共通

兼任教員

東 宏一郎 医学部 専任講師(有期)
石井 誠 医学部 専任講師(有期)
岩澤 聡子 医学部 専任講師(有期)
大前 和幸 医学部 教授
神田 武志 保健管理センター 専任講師
権丈 善一 商学部 教授
杉山 大典 医学部 専任講師(有期)
竹内 文乃 医学部 助教(有期)
中野 真規子 医学部 専任講師(有期)
橋本 健史 スポーツ医学研究センター 准教授
原田 成 医学部 助教(有期)
藤田 康範 経済学部 教授
真鍋 知宏 スポーツ医学研究センター 専任講師
吉村 公雄 医学部 専任講師

講師(非常勤)

赤堀 美和子 慶應義塾大学湘南藤沢メディアセンター
看護医療学部図書室担当 事務員(主務)
稲田 俊也 公益財団法人神経研究所副所長／
附属晴和病院 副院長
大伏 秀生 株式会社日本科学技術研修所
数理事業部 課長
井下 千以子 桜美林大学大学院 心理・教育学系 教授
大坪 宏至 東洋大学経営学部 教授
坂元 昇 川崎市健康福祉局 医務監
高橋 邦彦 名古屋大学大学院医学研究科 准教授
福吉 潤 株式会社キャンサースキャン 代表取締役
朴澤 泰男 国立教育政策研究所
高等教育研究部総括研究官
三谷 三恵子 慶應義塾大学信濃町メディアセンター 主任
矢澤 真奈美 日本医師会総合政策研究機構 研究員

指導教員

本研究科では、学生が入学前の背景に左右されず柔軟に専門領域を選択できるようにするため、入学時には指導教員を決定せず、1年次春学期には主として研究のための基盤づくりを主目的とする科目を履修した後、1年次秋学期より指導教員のもとで研究の方向性を固めていくことになります。

(2015.4.1 現在)

看護学専修

養成する人材像

看護学専修では、看護ケアの新しいあり方を開発・構築・実践できる人材として、深遠な知識と卓越した技術、柔軟な発想をもった実践家と、学際的で豊かな知識と高い倫理性に裏打ちされ、既存の枠組みにこだわらない構想力をもった教育者・研究者の養成を目指しています。なお、老年看護、精神看護、がん看護の3分野については、より高度な実践力を持つ専門看護師(Certified Nurse Specialist: CNS)を養成するための専門看護師(CNS)プログラムを併設しています。

専門分野の構成

看護学専修には、看護学の専門性に対応した看護学各分野における実践家、研究者、教育者の育成を目指すための複数分野がおかれ、それらは3領域(9分野)にまとめられています。

ライフステージケア領域

■母性看護分野

母性看護分野では、母性看護領域の実践、教育、研究の中核を担える人を養成します。母子の健康増進の課題を広い視野で現状分析し明らかにする研究、その課題を解決するための方法に関する研究、その評価に関する研究を推進します。

■小児看護分野

小児看護分野では、看護の場で生じる現象の構造とプロセスを的確に捉え、それを基にした新しい知見を実践の場にむかって発信できる質的

研究者の養成に主眼をおいています。小児看護学の基盤となる理論や研究法はゼミ形式で学びますが、演習や他のゼミ生との議論をととして学習を深化させるような環境をつくっています。

■老年看護分野(CNSプログラム併設)

老年看護分野では修士論文コースとCNSプログラムを併設しています。修士論文コースでは、高齢者の潜在力を活かしながら高齢者の生活の質の向上をめざす研究活動を促進し、CNSプログラムでは、高齢者ケアの質を発展させる人材育成を目指しています。超高齢社会の中で、高齢者や家族、関係職種との連携をもって、互いに支え合う仕組みづくりについて、柔軟な思考で取り組む姿勢を大事にしたいと考えます。

クリニカルケア領域

■基礎看護分野

基礎看護学分野では、看護の本質について探究しています。それまでの学習や臨床実践をもとに、さまざまな視点から看護について再考できるよう学習の機会を提供しています。具体的には、基礎看護学、看護技術方法論、基礎看護学演習の中で、看護の哲学、看護と倫理、EBNにもとづく看護実践、科学的思考、看護政策等について、文献検討や議論を通して思考の深化を支援しています。

■慢性臨床看護分野

- 1.慢性・長期的な健康状態(生活習慣病、がん、長期療養や通院、リハビリテーションを必要とする状況等)にある人・家族の健康課題を多面的に理解します。
- 2.最適な健康状態を維持・調整するための理論や概念の探索、研究方法論の探求を行います。

特徴:Evidenced-based practiceや実践開発研究に力を注いでいます。

■精神看護分野(CNSプログラム併設)

精神看護分野では修士論文コースとCNSプログラムを併設しています。

特に、専門看護師育成に力を入れた教育を行っており、精神看護学の基盤となる理論や介入論に関する講義、実践力を磨くための演習や実習等を、豊かな講師陣を配し、臨床との密な連携のもとに展開しています。また、実践における課題に焦点を当てた研究にも力を入れています。カリキュラムの外に定期的な事例検討会を開催しており、院生が修了後もつながりをもって学び合う気風を作っています。

■がん看護分野(CNSプログラム併設)

下記に焦点を当て、上級実践、教育、相談、調整、倫理調整研究に関する役割を担う人材の育成を目指します。

がんの予防・早期発見への取り組み

～がんとの共生を支える包括的看護実践～

- ・がんの発症に関与する遺伝的素因と環境要因に関する情報提供、予防・早期発見・治療のための医療の活用と選択に対する支援
- ・がんが患者および家族にもたらす、あらゆる苦痛・苦悩状況を緩和するための支援
- ・がんと共に生きる人のセルフマネジメントの支援

コミュニティケア領域

■在宅・家族看護分野

■地域看護分野

コミュニティケア領域の特徴

- 1.保健医療について鳥瞰的な立場で考えることのできる専門職として素

養を育成するため、他専修科目や他学部科目の積極的な履修を推進しています。

- 2.看護職としての専門性を高めることを目的としたフィールドワークによる研究。
- 3.専門性を高めるための方法論を強化しています。
- 4.修士論文作成に関連づけてのコミュニティケア関連科目内容を実施しています。

専門看護師(CNS)プログラム

専門看護師(Certified Nurse Specialist:CNS)プログラムは老年看護分野、がん看護分野、精神看護分野が置かれており、日本看護系大学協議会による専門看護師教育課程基準を満たす教育課程として組み立てられています。CNSプログラムでは、修士論文に代わり課題研究論文(CNS実習)を作成することになります。学生は、実習施設と担当教員の緊密な連携のもと実習指導を受けたうえで、実践的研究課題を取り上げ、講義・演習科目で培われた理論知のうえに立ち、CNS実習における実践知をふまえた総体的表現としての研究に取り組みます。

修了要件

2年以上在学(休学期間を除く)、所定の授業科目を48単位以上(導入科目2単位、分析手法基盤科目4単位、専門科目(分野別)38単位、特別研究科目4単位)を修得し、課題研究論文(CNS実習)の審査および最終試験に合格すること。

医療マネジメント専修

養成する人材像

医療マネジメント専修では、保健・医療・福祉システムの基本構造と、それぞれに裁量権を持った専門職が入り混じる現場の複雑性を理解したうえで、保健・医療・福祉サービス提供者に求められる、質の高いサービスの効率的な提供と個人のニーズに即したきめ細かなサービスの調整・統合を共に実現できる人材の養成を目指しています。

● 本専修の目的

今日、保健・医療・福祉機関並びに関連ビジネスには、質の高いサービスを効率的に提供することが求められています。同時に、各個人のニーズに即したきめ細かなサービスを調整・統合することが求められています。本専修は、それらを実現するマネジメントを研究・企画・実践できる人材を育成することを目的としています。つまり、病院のマネジメントだけではなく、介護施設、福祉施設、これらの領域に関連する民間企業など広い領域で将来活躍できる人材を輩出したいと考えています。

● 本専修入学者-出身大学・学部

本専修へは、慶應義塾大学の卒業生だけではなく、他大学の卒業生も多数入学しています。本専修の全入学者のうち、他大学卒業生の占める割合は、およそ7割です。また、入学者の中には、アメリカ、カナダ、中国、台湾の大学など、海外の大学を卒業した者もいます。入学者の出身学部も様々です。本専修には、医学・歯学・薬学・看護学といった、医療系学部の出身者とともに、非医療系学部(自然科学系学部、社会科学系学部、人文科学系学部)の出身者も数多く入学しています。従来、我が国では、医師、看護師、薬剤師…とそれぞれ自己完結的な教育プログラムの中で養成されて来た為に、医療の専門職の間でさえも言語と視点が共有できないことが、医療のマネジメントを難しくしています。その意味では、多様な背景の学生が集まって学ぶ学際的な環境こそが、医療マネジメントに最適な教育環境であると考えて大切にしています。

● 本専修入学者-新卒者と既卒者(職務経験を持つ者)

本専修の入学者には、新卒者と既卒者の双方の者がいます。本専修の全入学者のうち、既卒者の占める割合は、およそ7割です。既卒者の中には、医師・歯科医師・薬剤師・看護師などの保健医療福祉分野の専門職として勤務していた(勤務をしている)者だけでなく、公認会計士や税理士など、保健医療福祉分野以外の専門職として勤務していた(勤務をしている)者や、その他、一般企業や公的機関で勤務していた(勤務をしている)者がいます。また、社会人の学生の中には、退職したり休職したりして学業に専念する者もありますが、勤務先の理解を得て勤務時間を調整しながら、仕事と学業を両立させている者もいます。

● 講義概要

本専修では、他専修と同様に、導入教育、分析手法に関する教育、専門教育の3つの軸で、教育を進めています。

1. 導入教育

入学者の出身学部が様々であることや、入学者には新卒者と既卒者の双方の者がいることなどから、本専修では、バックグラウンド等が異なっても、一同に専門教育を受けることができるように、主として1年次の学生を対象として導入科目を開講しています。例えば、医療系学部の出身者は、医療関係の知識は十分に備えていますが、その他の分野の知識を十分に備えていません。また、非医療系学部の出身者は、その者が卒業した学部に関する知識は十分に備えていますが、医療関係の基礎知識を十分に備えていません。このため、上記のように、多様なバックグラウンドを持つ学生すべてが、各自の不足している知識を習得し、専門科目の中で一同に議論を行うことができるように、関連する基礎知識について解説する導入科目を設定しています。これらの科目は、経済学入門、公共政策・財政学入門、法学入門、臨床入門、ストレスケア入門、健康マネジメント概論、社会保障論、行動科学、ヘルスケア倫理学、基礎疫学などです。

2. 分析手法関連教育

本専修では、基礎教育と同時に、疫学や統計学といった、事物を分析・評価する際の科学的手法についての教育に強く取り組んでいます。しばしば、EBMとか、Evidence based medicineということばを聞きます。この考え方は、通常の臨床行為についてのみ重要であるのではなく、医療組織等の経営や医療制度の構築においても同様に重要となります。今までは、「勘と権威に頼った後ろ向きのマネジメント」でしたが、近年では、臨床データの実証的な分析に基づく組織運営や、制度設計が求められるようになっていきます。分析手法を習得することで、非医療系の学生も、医療の専門職と対等に議論する武器を持つことができます。

3. 専門教育

上記の基礎知識を備えた学生を対象として、本専修では、より専門的な教育を展開しています。これら専門科目は、本専修の目的を達成する上で不可欠です。このため、本専修の学生には、上記の分析科目と同様に、専門科目についても可能な限り多くの科目を履修することを推奨しています。各科目は、本研究科の専任教員だけでなく、慶應義塾の多様な学部・研究科に属する教員が担当していますが、共同担当することによってその学際性をよりはっきりしている科目もあります。例えば、「ヘルスサービス人的資源管理論」では、医療に関する専門職の特性と課題を医学部の教員が、一般的な人的資源管理の理論を経営管理研究科の教員が講義し、更に、これを統合するようにしています。このような講義を通じて、医療の現場の経験のある学生にとっては、普遍的な理論を学ぶことを通じて、今までの断片的な経験を体系化することができます。また、医療の現場の経験のない学生にとっては、医療の現場の複雑さを体系だって理解することができます。なお、専門科目として、スポーツマネジメント専修、看護学専修設置の専門科目も原則として履修することができます。それぞれの学生の専門や将来の志向に合わせて、幅を広げることができます。いずれの科目においても、理論的側面と実践的側面の双方を重視した授業を行っています。その際、知識習得型の教育にとどまらず、問題解決能力を養うための教育も重視しています。このため、授業の中では、教員が、伝統的な講義だけではなく、スモールグループディスカッションなど、他の教育手法を採用することも少なくありません。

● インターンシップ

本専修では、学生が実務に関する知識・技能を習得することができるように、学外の組織で実習等を行うインターンシップの制度を準備しています。インターンシップ先は、地域の中核病院、高齢者向けの専門病院、国立病院機構本部、大学病院の看護管理部門、製薬会社、保険会社、介護サービス関連企業をはじめ多様です。毎年、多くの学生が、第1学年と第2学年の間の春休みに約一か月間実習等を行っています。これによって、例えば、医師や看護師がそれまで全く経験の無い民間企業を体験したり、非医療系の学生が病院など医療・福祉サービスの現場を体験したりすることもできます。また、「インターンシップ関連科目」では、インターンシップの受け入れ先の担当者が非常勤講師として実務に関する体系だった教育を行います。つまり、学生は、インターンシップでの観察・経験を、更に授業を通じて、整理・洞察を深めることが可能になります。なお、インターンシップ制度を利用して観察実習等に参加した学生は、インターンシップ先で課題を見出し、それを題材に学位論文をまとめることも可能です。理論と実践を架橋した「課題研究論文」は、通常の「修士論文」と同等の学位論文として扱われます。

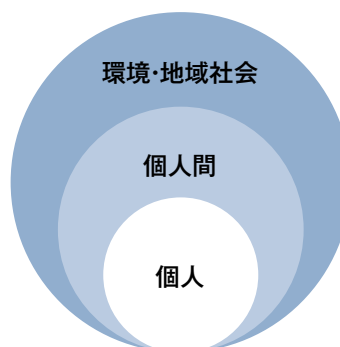
スポーツマネジメント専修

養成する人材像

スポーツマネジメント専修では、個人や集団の健康の維持・増進に資する知識と健康・スポーツビジネスのマネジメント技能を統合することによって、健康水準の高い社会のあり方を企画・実践でき、スポーツ文化の振興とスポーツ産業の発展に貢献できる人材の養成を目指しています。

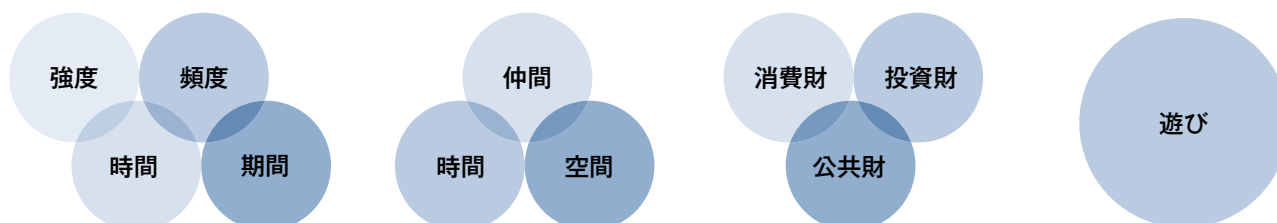
蔓延する運動不足

国際的な医学雑誌『TheLancet』は2012年7月号で「The Pandemic of Physical Inactivity(運動不足が大流行)」と題した特集を組みました。そのなかで、世界規模で運動不足は死因の第四位であるという報告がなされていました。便利で多忙な生活を送る現代人は、労働・家事・通勤・通学など、日常生活のいずれの場面においても身体を動かす必要や機会が少なくなっています。このことを踏まえれば、運動不足解消を含めた健康増進は一個人だけの問題ではなく、近隣(Neighborhood)や地域社会(Community)で取り組むべき課題と捉えることができます。



スポーツの捉え方

体を動かす活動は、身体活動(physical activity)、余暇時間での運動(leisure-time physical activity)、エクササイズ(exercise)、スポーツ(sports)に階層化されますが、本専修では、スポーツやエクササイズにとどまらず、余暇時間での運動や身体活動まで含めてスポーツを広義なものとして捉えています。適度なスポーツが健康に良いことは誰でも知っています。しかし、適度を理解している人は多くはないでしょう。例えば、スポーツを強度×時間×頻度×期間に分解することによって、適度についての理解を深めることはできます。もちろん、これだけでは地域社会の問題としての運動不足を解決することはできません。スポーツは時間・空間・仲間という3つの間から成るといわれています。また、従来、スポーツは余暇に行うものとして消費財として位置づけられてきましたが、健康活動や教育活動としてのスポーツは投資財や公共財としても捉えることができます。スポーツの根源が遊びであることの理解も重要です。このように、本専修では、医科学や公衆衛生学、経営学などの観点からスポーツを多面的に捉え、スポーツによる地域社会の健康問題の解決に取り組みます。



先ず獣身を成して後に人心を養え

「先ず獣身を成して後に人心を養え」これは福澤諭吉の子育ての基本姿勢を語った言葉で、獣身とは健康な身体を意味します。元気で活動的な毎日を送るために、スポーツを通じて健康な身体をつくり、また健康な身体をつくる習慣を身に付ける。現代社会においては、子供に限らず、あらゆる年齢層の人に当てはまるといえます。

公衆衛生プログラム

※公衆衛生プログラムは医療マネジメント専修とスポーツマネジメント専修への入学者が対象となります

養成する人材像

公衆衛生はすべての人々の健康の維持・増進と生活の質の向上を目指す実践の学問です。現代社会では、保健・医療・ケアにわたる幅広い領域で、地域から地球規模にまで広がる健康課題の解決を図ることのできる人材が強く求められています。公衆衛生プログラムは、こうしたグローバルな健康課題解決の担い手として、世界の健康長寿社会実現の先導者たらしめる人材の養成を目指しています。

分析力と実践力を磨き、課題解決能力を育む教育プログラム

公衆衛生の領域ではさまざまなバックグラウンドをもつ人材が必要とされています。そのため本プログラムは「人材の多様性」をもっと大切にし、医療者も、医療以外の分野で経験を積んできた入学者也、それぞれが目標に向かって学べる多彩な授業科目を整えています。また近年は、国際機関や政府、自治体に加え、民間財団や民間企業あるいは住民・市民といった「民」が迅速な課題解決に大きな力を発揮しつつあります。こうした新しい視点も重視しています。

このような特徴のもと、公衆衛生の両輪である実践と研究のいずれの分野でも活躍できるイノベティブな人材を育てるため、分析力と実践力を磨き、公衆衛生の専門家として必要となる知識・技能とともに、多様な価値観や倫理観が行き交う現場で課題解決力を発揮するためのマネジメント力を身につけることができる公衆衛生教育プログラムを提供しています。

科目構成

- 基盤となる専門的知識・技能のため、国際基準に則った基本5領域から構成されるコア科目を提供（全員必修）。
- 現場での課題解決に必要な資質と能力涵養のため、7つの分野にわたる幅広い科目群を提供（必修および選択）。
- 専門性を深めるため、幅広い授業科目（40以上）から履修可能（選択）。
- 慶應義塾の他研究科との連携を重視するとともに、実践現場で活躍するリーダーによる科目を開講。

基盤となる専門的知識・技能

生物統計学
疫学
医療政策・管理学
社会／行動科学
環境保健学

課題解決のための資質・能力

コミュニケーションと情報
多様性・多文化への配慮
リーダーシップ
公衆衛生における生物学
プロフェッショナリズム
プログラム策定
システム思考

導入科目	● 基礎疫学*	● 健康マネジメント概論*	● ヘルスケア倫理学
分析手法科目	● 基礎生物統計学I* ● 疫学研究の統計的方法	● 基礎生物統計学II*	● 応用生物統計学
専門科目	● 医療政策・管理学* ● 公衆衛生マネジメント* ● ヘルスプロモーション ● 健康栄養科学 ● 地域保健学	● 健康行動科学* ● ソーシャルマーケティング ● ヘルスコミュニケーション ● 感染症疫学・サーベイランス	● 環境・産業保健学* ● 国際保健学 ● 健康運動科学 ● 生活習慣病疫学
インターンシップ関連科目	● 健康都市デザイン論	● 公衆衛生実践	● 健康ビジネス開発論
特別研究科目	● 特別研究*		

*必修科目

主な研究プロジェクト

- 最先端技術を用いたテラーメイドの予防医療実現を目指す大規模地域コホート研究（武林亭）
- 日本の大規模コホート研究の統合と協同による生活習慣病予防のエビデンス構築研究（岡村智教）
- 世界のHIV感染症の疫学と予防対策の研究（鎌倉光宏）
- 環境要因の健康リスクのコントロールを目指す疫学およびリスク評価研究（大前和幸／武林亭）
- コミュニティアプローチをベースとした藤沢身体活動促進プロジェクト（小熊祐子／齋藤義信）
- 長岡市の多世代健康まちづくりの研究（高木安雄／他施設連携プロジェクト）
- 自殺稀少地域をモデルとした自殺予防因子の研究（山内慶太／岡檀）
- 診療・医学系研究におけるインフォームド・コンセントについての法的・倫理的研究（前田正一）
- 生体ログデータ分析とその利活用（渡辺美智子、他施設連携プロジェクト）
- 健康長寿社会を先導する超高齢者の包括的疫学研究（医学部百寿総合研究センターとの連携プロジェクト）

インターンシップ

医療マネジメント専修とスポーツマネジメント専修(公衆衛生プログラム含む)は、学生に対してインターンシップの実施を推奨しています。健康マネジメントの諸領域において実務家あるいは研究者として先導的役割を果たすためには、実践と科学を融合し、複雑な課題に対して創造的な解決策を導き出せる能力の修得が不可欠であることから、インターンシップを教育の柱のひとつと位置づけています。修士論文ではなく「課題研究論文(インターンシップ)」による学位審査を選択する学生は、インターンシップ関連科目の履修、インターンシップへの参加、「特別研究」の履修による「課題研究論文(インターンシップ)」の作成、という一連の流れにより学習・研究を進めます。インターンシップは、2年次に履修する「特別研究」の一部として設定されています。なお、看護学専修のカリキュラムには、インターンシップはありません。

● 主な派遣先

医療マネジメント

河北総合病院／湘南中央病院／青梅慶友病院／竹田総合病院／国立病院機構東京医療センター／慶應義塾大学病院／Meiji Seikaファルマ株式会社／ニチイ学館／テルモ株式会社／日本生命相互会社／大成建設株式会社／株式会社ソラスト(旧・日本医療事務センター)／財団法人日本医療機能評価機構／財団法人ダイヤ高齢社会研究財団／国立病院機構本部／日本看護協会

スポーツマネジメント

藤沢市保健医療センター／慶應義塾大学スポーツ医学研究センター／イマジン・グローバル・ケア／Food Connection／タニタヘルスリンク／大成建設株式会社／日本スケート連盟／日本フライングフットボール協会／世田谷区スポーツ振興財団／横浜FC／ロアッソ熊本／東京ヴェルディバレーボールチーム／名古屋フラーテル／高津総合スポーツクラブSELF／昭和の森テニスセンター／マナーキッズプロジェクト

学位論文(修士)

2013年度、2014年度の学位論文(修士)の一部を紹介します。過去の論文タイトルはウェブサイトに掲載しています。

● 看護学専修

- 救命救急センター看護師による終末期患者の家族に対する精神的ケアの実態(2013年)
- 臨地実習における倫理的問題に対する看護学生の対応過程(2013年)
- 自然分娩における分娩第Ⅱ期持続時間が母児の周産期リスクの発生率に及ぼす影響に関する研究～初産婦に焦点をあてて～(2014年)
- きょうだいを主役にする一小児集中治療室入院児と面会するきょうだいへの働きかけ(2014年)
- 精神科看護師がとらえる病棟風土と自己表現特性との関連(2014年)

● 医療マネジメント専修

- 小児医療における医師の患児への説明と意思尊重に関する研究—自律能力と意思尊重との関係—(2013年)
- 病院に勤務する看護職のワーク・ライフ・バランスに関する研究—残業の構造と職場意識の影響—(2013年)
- 藤沢市における国民健康保険に加入する30歳代被保険者を対象としたヘルスコミュニケーション(HC)戦略に関する研究(2014年)
- 居宅介護支援事業所におけるケアマネジャーのワークコミットメントに関する研究—研修参加行動との関連—(2014年)
- 製薬企業の定量的評価と定性的評価の連関に関する研究—CSR報告書のテキスト分析を用いた一考察—(2014年)

● スポーツマネジメント専修

- 勤労者を対象としたフットサル実施動機分析(2013年)
- 超高齢者の生活の質(QOL)と身体活動・健康状態・体力・社会的支援の関連:the Tokyo Oldest Old Survey on Total Health (TOOTH)研究における横断的検討(2013年)
- 身体活動に影響を及ぼす要因の検討:藤沢市保健医療センターにおける「健康づくりトレーニング」経験者を対象として(2014年)
- 健康意識や健康行動に関する質問紙調査を用いた市民類型化とターゲティングの検討(2014年)
- 新興国における国際スポーツイベント招致に関する研究:スリランカを事例として(2014年)

修了生の進路

本研究科修了後の主な進路としては、看護・保健・医療・福祉・公衆衛生に関連する企業や施設、機関などへの就職と、研究者を志望しての後期博士課程への進学があります。たとえば、金融機関実務経験者の医療機関への就職や、新しい領域における起業など、これまでの経験と、本研究科で修得した基礎的・総合的な健康マネジメントに関する知識を融合させ、出身学部や前職からは従来想定されていなかった分野に進む新たなキャリアの創造が可能になるのも、本研究科の特色です。

看護学専修

●大学教員 ●病院(看護師) ●病院(助産師) ●自治体(保健師)

医療マネジメント専修

●金融系シンクタンク ●医療系研究機関 ●医療経営コンサルティング会社 ●情報・ネットワークサービス会社
●生命保険会社 ●製薬会社 ●食品メーカー ●新聞社 ●証券会社 ●病院団体 ●県教職員(特別支援学校教員)
●高齢者ケア施設経営 ●薬局(薬剤師) ●医科大学(事務部門) ●病院(医療安全部門・事務部門)
●病院(医師・看護師・ソーシャルワーカー・理学療法士等)

スポーツマネジメント専修

●大学教員 ●中学校教員 ●小学校教員 ●地方公共団体職員(行政職、保健師) ●銀行 ●生命保険会社
●総合商社 ●広告会社 ●経営コンサルティング会社 ●ITサービス会社 ●人材サービス会社 ●新聞社
●スポーツ用品流通販売会社 ●スポーツ統括団体 ●フィットネスクラブ(事務職、理学療法士)

健康マネジメント研究科三田会

慶應義塾では、在学生は「塾生」、卒業生は「塾員」、塾員の同窓会組織は総称して「三田会」と呼ばれています。健康マネジメント研究科三田会(健マネ三田会)は、本研究科の塾員、塾生、教員等による親睦や知的交流を目的として、第一期生が自発的に結成した三田会です。健マネ三田会は塾生をサポートする活動も行っています。塾生同士のヨコのつながりだけでなく、塾生と塾員のタテのつながりも本研究科の特色といえます。



後期博士課程

養成する人材像

修士課程においては、健康や疾病に関わる専門知識や技術を単に修得するだけでなく、「社会との関わりを基盤として看護・保健・医療・福祉のあり方を構想する広い視野・鋭い洞察力・高い実践力」そして「疾病から健康にいたる科学的知識に基づく高度なマネジメント能力」を併せ持った研究者、実務家の養成を目標としています。このような人材養成の目標を基盤として、各専修それぞれに次のような個別目標を掲げています。

看護学専修では、看護ケアの新しいあり方を開発・構築・実践できる人材として、深遠な知識と卓越した技術、柔軟な発想をもった実践家と、学際的で豊かな知識と高い倫理性に裏打ちされ、既存の枠組みにこだわらない構想力をもった教育者・研究者の養成を目指しています。

医療マネジメント専修では、保健・医療・福祉システムの基本構造と、それぞれに裁量権を持った専門職が入り混じる現場の複雑性を理解したうえで、保健・医療・福祉サービス提供者に求められる、質の高いサービスの効率的な提供と個人のニーズに即したきめ細かなサービスの調整・統合を共に実現できる人材の養成を目指しています。

スポーツマネジメント専修では、個人や集団の健康の維持・向上に資する知識と健康・スポーツビジネスのマネジメント技能を統合することによって、健康水準の高い社会のあり方を企画・実践でき、スポーツ文化の振興とスポーツ産業の発展に貢献できる人材の養成を目指しています。

医療マネジメント専修とスポーツマネジメント専修にまたがる公衆衛生プログラムでは、公衆衛生領域において新しい科学的知見の創出から政策、マネジメント、コミュニケーションに至る最先端の研究活動と社会活動を行う、科学と実践に立脚した実学たる公衆衛生分野を先導し、すべての人々の健康の維持・増進とQOL向上を図ることができる人材の養成を目指しています。

後期博士課程においては、修士課程で培った素養に加え、高度化・複雑化が加速的に進行している看護・保健・医療・福祉・公衆衛生の領域において、迅速かつ適切に課題を見出す分析能力や、多様な背景や専門能力を持つ研究者や実務家などを統合して効果的かつ効率的に解決に導く統率力を有する、先導的役割を果たす研究者、教育者、実務家の養成を目指します。

カリキュラム構成

学生が3年間の履修を修了すると同時に博士の学位を取得することが原則的に可能なように、研究指導、論文指導が行われます。学位授与に至る各段階に応じた指導と、複数の教員での諸科学横断的なアプローチによる研究指導を確実かつ適切に受けるために、個別の研究指導の時間だけでなく、基礎的理論と実証的研究の方法論・分析手法を確認する特論科目(1年次)と、履修者および学内外の研究者、実務家による研究報告と討議を中心に行う合同演習科目(1～3年次)が設置されています。なお、他研究科修士課程修了者や、本研究科修士課程修了後しばらくの期間実務に就いていて最新の理論や分析手法等に精通していない者は、指導教員の指示に従い修士課程設置科目を履修することで知識を補完することができます。

修了要件

後期博士課程に3年以上在学(休学期間を除く)し、所定単位(特論科目4単位、合同演習科目6単位以上の計10単位以上)を修得し、かつ研究上必要な指導を受けたうえで博士論文の審査および最終試験に合格することとなっています。

学位論文(博士)

看護学専修

- 産褥早期における背部マッサージのリラクゼーション効果に関する研究—生理的指標と主観的指標による検証— (2011年度)
- 脳梗塞の急性期治療を受ける高齢患者におけるせん妄状態出現と関連する因子の実態 (2013年度)
- 認知症高齢者のためのパーソン・センタード・ケアの理論を基盤とした園芸活動プログラムの開発と有効性の検討 (2013年度)

医療マネジメント専修

- 日本の自殺希少地域における自殺予防因子の研究 (2011年度)

スポーツマネジメント専修

- 振動を利用した筋力トレーニングの筋フィットネスへの効果及びプログラム作成に向けての検討 —運動習慣のない健康成人を対象にして— (2011年度)
- 身体活動を促進する近隣環境要因の究明 —神奈川県藤沢市在住の中高齢者を対象として— (2013年度)
- 太極拳による精神的健康への効果についての研究 —構造方程式モデリングによるアプローチ— (2013年度)
- 骨粗鬆症の1次予防—閉経前女性市民ランナーの骨強度増加に向けた試み— (2014年度)

入学試験

入学試験

募集人員：修士課程40名(I期・II期・III期合計)、後期博士課程10名

	I 期	II 期	III 期
募集対象	修士課程	修士課程・後期博士課程	修士課程
出願期間	2015年6月10日(水)～6月16日(火)	2015年10月29日(木)～11月4日(水)	2016年1月6日(水)～1月12日(火)
試験日 (小論文・面接)	2015年7月11日(土)	修士課程 2015年11月28日(土) 後期博士課程 2015年11月29日(日)	2016年1月30日(土)
合格発表日	2015年7月16日(木) 午前10時	2015年12月3日(木) 午前10時	2016年2月4日(木) 午前10時
入学手続期間	2015年12月10日(木)～12月16日(水)	2015年12月10日(木)～12月16日(水)	2016年2月12日(金)～2月18日(木)

出願資格等、試験の詳細については必ず募集要項でご確認願います。募集要項は、ホームページ(<http://gshm.sfc.keio.ac.jp/>)で公開しています。

入学金・授業料その他必要経費

(2016年度)

(単位:円)

	学費	学会資料購読料	学生健康保険互助組合費	合計
修士	1,630,000	8,000	2,600	1,640,600
博士	710,000	8,000	2,600	720,600

奨学制度

研究の意欲を持ち、経済的な理由により修学が困難で、かつ成績・人物ともに優秀な学生を対象に、次のような奨学制度を設けています。

- 慶應義塾大学大学院奨学金 慶應義塾大学独自の奨学金(給付)です。
- 総合医学教育奨励基金奨学金 修士課程2年生対象の、研究科独自の奨学金(給付)です。
(健康マネジメント研究科)
- 指定寄付奨学金 同窓会組織・卒業生個人などからの寄付による奨学金(給付)です。
- 日本学生支援機構奨学金 国の奨学制度で、経済的理由により修学に困難がある学生に対し貸与されます。
「第一種奨学金」(無利子貸与、返還免除制度あり)と「第二種奨学金」(有利子貸与)があります。
- 民間団体・地方公共団体奨学金 地方公共団体、社・財団法人、企業などによる奨学金(給付・貸与)です。
- 慶應義塾大学教育ローン制度 提携先金融機関から学費を借り入れる学費ローンです。

2015年度健康マネジメント研究科説明会

事前の予約・連絡等は一切不要です。詳細はホームページでお知らせします。

第1回	●日時:2015年5月15日(金) 18:30～20:30 ●場所:三田キャンパス・北館ホール	第4回	●日時:2015年10月2日(金) 18:30～20:30 ●場所:三田キャンパス・北館ホール
第2回	●日時:2015年6月6日(土) 17:00～19:00 ●場所:三田キャンパス・北館ホール	第5回	●日時:2015年10月24日(土) 17:00～19:00 ●場所:三田キャンパス・北館ホール
第3回	●日時:2015年8月21日(金) 18:30～20:30 ●場所:信濃町キャンパス・孝養舎202教室		

〈内容(予定)〉※1回～5回まで同内容ですが、参加教員が異なる場合があります。

●研究科の教育・研究内容・入試について ●専修別概要説明 ●公衆衛生プログラム概要説明 ●質疑応答 ●個別相談(教員・在学生)

 慶應義塾大学
大学院健康マネジメント研究科

〒252-0883 神奈川県藤沢市遠藤4411 Tel. 0466-49-6265

<http://gshm.sfc.keio.ac.jp/>